

幼児教育における環境を通して行う教育としての 仕掛け

佐々木 由美子¹⁾・近末 克紀²⁾

Educational Gimmicks as Education Conducted Through the Environment in Early Childhood Education

Yumiko SASAKI, Katsunori CHIKASUE

1) 足利短期大学こども学科 2) 大泉町立北保育園

Abstract

The three revisions to laws and regulations of 2018 reemphasized the importance of the environment in early childhood education. ECEC teachers need to fully understand the importance and think about the various experiences of children in relation to the environment. In addition, it is also important for ECEC teachers to enjoy childcare life and play together with children they supervise as a peer in order to accurately grasp the children's interests and thoughts and to have close relationship with them. This time, we studied the activities, which incorporated the project approach, of a group of 5-year-olds prior to an overnight stay childcare. Then, the activity was analyzed using episode description, and the development of the children that occurred with the progress of the activity through the educational gimmicks as the environmental configuration was examined. The characteristic of the project approach in this childcare center was the great number of educational gimmicks prepared by the ECEC teachers. The children who were guided by the educational gimmicks learned cooperativeness through various experiences. The children solved the problems one after another through trial and error. Through that process, the children bonded together with their classmates. As a result, it is thought that educational gimmicks as an environmental configuration had a great influence on the development of children.

Keywords: environmental configuration, educational gimmicks, project approach, episode description, development of children

1. はじめに

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3つを合わせた通称「3法令」が、平成29年3月に大きく改訂（改定）され、平成30年の4月から施行されている。各要領・指針は昭和23年に作成された保育要領（文部省刊行）から始まり、今改訂（改定）にいたるま

で、何度もの改訂（改定）により変遷を遂げてきた。また、平成26年には、平成27年の子ども・子育て支援制度のスタートに向けて、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が策定され、3つの施設の要領・指針が揃ったのである。

平成29年の改訂（改定）は、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の3つの施設がいずれも「質の高い教育が受けられる幼児教育施設」として位置づけられたことによるものである。これまで、幼稚

園は教育、保育所は福祉、認定こども園はその中間というイメージがあったが、この改訂（改定）により、3つの施設の内容や質を統一することで、幼児教育の形を整え、子どもがどの施設に通っても同等の教育を受けられることを目指すものとなった。新要領・指針には、生きる力の基礎を育むため、資質・能力を一体的に育むことが記載されている（幼稚園教育要領 第1章総則 第2、保育所保育指針 第1章総則-4、幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章総則 第1-3）。そして、これらの資質・能力とともに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を明確化した（図1）。

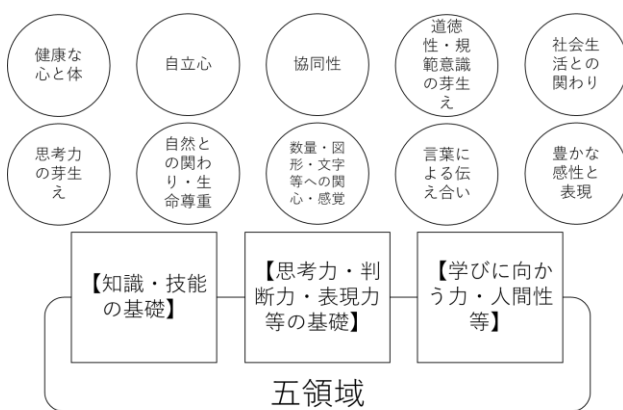


図1 3つの柱と10の姿

さらに、小学校教育との接続について以下の記述がある（幼稚園教育要領 第1章総則 第3-5（2）、保育所保育指針 第2章保育の内容 4（2）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領 第1章総則 第2-1（5））。幼稚園教育において育まれた資質・能力（※保育所保育指針では、「保育所保育において育まれた資質・能力」幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、「幼保連携型認定こども園の教育及び保育において）を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼保連携型認定こども園における教育及び保育（※幼稚園教育要領では「幼稚園教育」、保育所保育指針では、「保育所保育」）と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする、とある。

このように、新要領・指針では、幼児教育の基本的部分と幼児期に育むべき力がさらに明確になったのである。中でも、幼児教育の基本的考え方として幼児教育は「環境を通して行うものである」という

ことである。これは、今改訂（改定）以前から変わらない考え方であり、幼児教育の基本理念である。

これについては、各要領・指針に以下の記述がある。

① 幼稚園教育要領

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする（第1章 総則 第1）。

② 保育所保育指針

保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている（第1章 総則 第1(1)イ）。

③ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領

乳幼児期の教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律第2条第7項に規定する目的及び第9条に掲げる目標を達成するため、乳幼児期全体を通して、その特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域での生活を含めた園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない（第1章 総則 第1-1）。

以上のように、改訂（改定）後の3法令においても、幼児教育における環境の重要性が改めて強調されている。そこで本研究では、子どもと環境の相互作用がもたらす効果について明らかにするため、5歳児クラスを対象として、子どもが主体的に学ぶ環境構成としての仕掛けを通じた事例を分析し、考察する。

2. 研究目的と方法

本研究では、プロジェクト・アプローチにおける環境構成として、さまざまな仕掛けを設定した事例のエピソード記述から、子どもの興味・関心・意欲などを読み取り、子どもの行動と環境（仕掛け）の相互作用について分析・考察することを目的とする。

プロジェクト・アプローチとは、アメリカやイギリス等で取り組まれている保育実践の1つで、レッ

ジョ・エミリアをモデルとした保育形態である。プロジェクト活動内容とは、1つのテーマを、数か月～1年といった長期間にわたり子どもたちと保育者、保護者が一緒に掘り下げていく活動のことである。プロジェクト活動を重ねることで、自分の考えを主張する自主性や、他者と話し合っ進める協調性が身に付き、自分たちで目的を見つけ出す探究力を育み、協同的な活動の中で自分の役割を見出し理解できるようにするとされている。

エピソード記述は、質的研究アプローチの1つであり、参与観察・インタビューなどをおして捉えた事象に「生の実相のあるがままに迫る」(鯨岡 2005) ための手法である。本研究においては、鯨岡(2005)の理論に従ってエピソードを記述する。

それらのエピソード記述を分析することで、あそびの展開図(ウェブ図)を作成し、仕掛けを通した遊び活動の進展とともに起こる子どもの変化について捉える。

3. 倫理的配慮

調査を基にしたエピソード記述においては、個人情報保護するため、個人が特定できないよう配慮する。なお、本研究は、足利短期大学研究倫理委員会の審議を経て承認されたものである。

4. エピソード記述

この事例は、2018年に群馬県大泉町の公立保育園で行われた年長児クラスの「お泊り保育」に向けた約1か月間のプロジェクト活動の記録である。子どもの育ちを保育者の視点で捉えている。

(1) プロジェクト設定の趣旨

子どもの生活の中心には遊びがある。多種多様な遊びの中で、物語の世界を通して想像的に遊ぶことが、子どもたちの内面を大きく育てることにつながる。色々な物語に触れ、その物語の世界で遊ぶことで、子どもたちは登場人物になりきって、みるみる物語の中に入り込んでいく。保育者も子どもたちと一緒に楽しく遊んでいくのはもちろんだが、その過程で様々な仕掛けをしていく。そうすることで、子どもたちと保育者に共通したワクワク感や想像的な期待が生まれ、遊びが広がり発展し、「子どもたちの内面から湧き出る言葉や行動」を引き出してい

く。

子どもたちは、そうした想像的で創造的な遊びのなかで、様々な経験をし、葛藤しながら自己肯定感を高め、「自ら考え行動する力」「他者への思いやり」「やりぬく力」「興味・関心・探求心」「道徳感」など、おおよそ保育所保育指針で謳われている「10の姿」や「生きる力」の基礎を、自分で獲得していく。

遊びを中心とした生活の中で、保育者がしっかりと子どもたちと向き合い、受け止め、環境構成としての仕掛けを準備しながら、豊かに遊べる想像的・創造的環境を整えていくことで“子どもたちが自ら育ちあう”「子育て」ができあがっていく。そこで身につけた力は、他の様々な活動(リズム表現・歌・描画など)にも枝葉を伸ばし、さらに子どもたちの内面を充実させ“全面発達”につながっていく。目の前にいる子どもたちの姿をしっかりと捉え、教材(物語や歌曲・組曲)や仕掛けをワクワクしながら考え、創り出し、共に楽しんでいくことが保育者に求められる保育の本質なのである。

(2) 準備

この年の年長児は、男児18名、女児8名の26名である。そのうち外国籍児は5名である。調子に乗りすぎて失敗するようなことの多い男児と、しっかりもので面倒見の良い女児。明るく元気がよくてまっすぐな、まさに「子どもらしい」子どもたちである。

担任は、シンプルでとにかく子どもたちと一緒にワクワクできて楽しめる教材を用いて、お泊り保育にむけて活動していきたいと考え、「忍者」を教材として選んだ。担任が忍者に対しての知識があり、ストーリーや仕掛けが想像・創造しやすく、子どもたちと楽しく活動できるビジョンが得られたため、ベースとなる物語がある訳ではなかったが、この教材を選んだ。

はじめに、ある程度のストーリーを考えた。実在したとされている、服部半蔵と風魔小太郎という忍者を軸に考えていく。想像的な物語の世界をより実感し、経験していくために、現実とリンクする仕掛けも取り入れたいと考え、物語の中の登場人物から手紙やアイテムが届いたりするアイデアを組み込むことにした。こうして出来上がったおおよそのストーリーが以下である。

良い者忍者の服部半蔵の大切にしている「刀」

を、悪者忍者の風魔小太郎が狙っているというものである。ある日、年長児に宛てて「私の刀を守ってくれ」と服部半蔵から手紙が届く。そこから子どもたちの忍者物語が動き出し、途中風魔小太郎が実際に刀を奪いにきたり、頭をつかたり、みんなで協力しながら様々な経験・仕掛け・葛藤を乗り越え無事、刀を守り切り、お泊り保育当日に服部半蔵に「刀」を返すというストーリーである。

他の保育者とも相談しながら、おおよその日程や仕掛けの内容を決めていった。多くの保育者と情報を共有することで、自分の中にはなかったアイデアが得られたり、ワクワク感や子どもの姿や心の動き（成長）を共感したりできる。これも、仕掛けをつくり環境を整えていくうえで、極めて重要だと考えられる。

おおよそのストーリーと日程が決まれば、あとは仕掛けを実行していただくだけだ。その先の展開は子どもたちとともに創造していく。全て初めから決めてあっては、面白くない。保育者と子どもたちの共感が生まれにくくなってしまう。その都度、子どもたちの姿を捉えながら、必要に応じて保育者同士で相談・情報共有をしながら遊び・仕掛けを創りだしていく。

（3）導入

6月4日（月）に1つ目の仕掛けとして、謎の手紙が届くようにする。この仕掛けのために、和風の柄の入った布に和紙を張り付け、巻物のようなものを用意した。そこに筆と墨汁で謎の地図を記入した。その地図には、電車のような乗り物、線路、大きなかかし、山、赤く丸印がつけられた建物など（藪塚町の三日月村という施設）が描かれている。これを、子どもたちと遊びに行った先の公園（お堀のある城跡公園）に仕掛けることにした。仕掛ける演出として、遊んでいる最中に“ほら貝”の音がして煙幕をあげる、煙幕と音のするほうに探しにいくと、木の根元に巻物と手裏剣と苦無（忍者の武器）があるという設定にした。手裏剣と苦無は刃の付いていない安全なものを用意した。ほら貝は知人から借り、副園長に吹いてもらう。巻物の設置は園長にお願いをした。煙幕（花火の煙玉）を使用するので役場からの許可を得た。

いつものように公園で遊んでいると、遠くで何やら聞きなれない音がしていることに気づき、煙があがっていることに子どもたちが気づく。隠れながら

様子を見ていた副園長・園長のタイミングも絶妙だった。遠くから近づき様子を伺うが人の気配はなく、少し怖くなって不安そうにしている子どももいた。少しずつ距離を縮めながら煙に近づいていくと、Mくんが巻物を発見した。他の子どもたちも興味津々で人だかりができる。担任が「開けてみる」と問いかけると「うん」と一斉に返事が返ってくる。一人一人の目が輝いている。開けてみせると子どもたちは不思議そうな顔で見つめていた。「地図かなあ」との言葉も出てくる。みんなで相談をし、保育園に持ち帰り調べてみるようになった。

保育園に戻ると、公園で体験した出来事を、他のクラスや保育者、副園長、園長に報告に走る子どもたちの姿があった。地図の内容が何を示しているのか聞いて回るが、みんなわからないと言う。あらためてみんなで集まり、地図の中のヒントと自分たちのなかにある知識とをすり合わせるが結論は出ず、相談の結果、子どもたち一人一人が家族に聞いてみて、その回答を次の日に発表することになった。

翌6月5日（火）、子どもたちが集まると、みんな自分の調べてきた情報を話したくて仕方がない様子で、指名していくと堰を切ったように話し出す。そして有力な情報をまとめていくうちに、「藪塚町にある三日月村というところに、電車に乗って来てってことだ」という結論に至った。偶然にも藪塚町出身の保護者がおり、電車に乗っていくと駅を出た所から大きなかかしが見え、その道なりに進んでいくと三日月村というところがあるという情報が決め手となった。

少し怖いけれど、勇気を出して行ってみようということになり、6月7日（木）に電車に乗って行ってみることにする。

（4）実践1 三日月村と服部半蔵との出会い

三日月村は江戸時代の街並みが再現され、不思議な体験（傾斜を利用して、ボールが上に転がっていくように見えるなど、平衡感覚がおかしくなってしまうような体験）ができる建物や、隠し部屋や隠し扉が多数仕掛けられた絡繰り屋敷、不気味な雰囲気洞窟などの施設があるテーマパークである。地図に導かれ、これら3つの施設を経験した帰り道に、次の仕掛けとして手紙と刀を準備した。巻物には、「私は服部半蔵という名の忍者だ。ここ三日月村で毎日修行をしている。私の大事な刀を風魔小太郎という悪い忍者が狙っている。いつも明るく元気

な君たちに、しばらくの間守って欲しい。いつも君たちのことを見守っているぞ」という内容が記されていた。刀は刃の付いていない安全なものを用意し、設置は副園長にお願いした。

最寄りの駅から電車に乗り、しばらく進むと「次はやぶづか〜やぶづか〜」と車内アナウンスが流れる。同時に目をまん丸にして高揚する子どもたちの姿があった。ドキドキが全身からあふれ出ている。駅に降り、緊張しながら歩みを進めると、大きななかかしが視界に入ってくる。子どもたちの中に、想像と現実がリンクしてくる感覚と、物語の世界に足を踏み入れたような冒険心が一気に湧き上がってくるのが見て取れる。保育者もその感動と一緒に味わいながら、「次は何がおこるの」という好奇心が子どもたちの足を速めていることを感じ、逸る気持ちを落ち着かせながら歩みを進める。

大きななかかしを通り過ぎ、少し山を登っていくとそれは、突然目の前に現れた。まるでタイムスリップしたかのような街道と街並みである。子どもたちも静まり返り、胸の高鳴りが聞えてくる程だった。恐る恐る施設内に入っていくと、「うわ〜」と思わず歓声があがる。「昔みたい」「忍者が住んでるんじゃない」と一瞬よぎった恐怖心が、好奇心と冒険心にあっという間にかき消されていくのが手に取るように感じられた。こうした心の動きが、子どもたちの内面を育てていく。

前述した3つの施設を経験するなかで、怖くて動けない子がいると、そっと手をつないであげる子どもたちの姿や、「みんないるから大丈夫だよ」と声をかけながら進んでいく姿が多くみられた。その帰り道、木の根元に刀と2つ目の巻物があるのを子どもたちが発見する。手紙の内容に、少しだけ不安を抱きつつも、「みんなで力を合わせ守りぬこう」と決心し、保育園に持ち帰ることになった。

(5) 実践2 服部半蔵との約束

三日月村への大冒険の翌日から、保育園は忍者一色になった。経験してきた冒険譚はあっという間に保育園中を駆け巡り、子どもたちの忍者修行(遊び)がはじまった。速く走る・高く跳ぶ・何かに化ける等々、一人一人が忍者になりきっている。それと並行して忍者図鑑や忍者の解説本、絵本などで忍者に関する知識を身につけていった。部屋の片隅には、半蔵から預かった刀が鎮座し、忍者にまつわるグッズが展示してある“忍者コーナー”ができ、忍

者が精神を集中するときなどに使っていたとされる印(いん)を結ぶ行為も、子どもたちと覚えていった(臨・兵・闘・者・階・陣・列・在・前)。

こうして忍者修行(遊び)が進むにつれ、クラスの雰囲気の一つにまとまっていくのを感じた。集団として同じ方向を向いて、共通意識をもった仲間同士として進んでいる子どもたちの姿があった。そこで手応えを感じた担任は、子どもたちの苦手な部分に修行を通して向き合っていけるように、半蔵から届く3つ目の巻物(6月14日に忍者コーナーに子どもたちが気づかないうちに置いておく)の中に、「人の話をよく聞く」「静かに耳を澄ませる」などの修行に取り組むように書き、さらに修行を頑張れるように、ゴム製の手裏剣を半蔵からの贈り物として、子どもたちに渡していった。そしてその巻物の最後に、「いよいよあいつが動き出したようだ。ねずみ色に気をつけろ」と書いた。修行に取り組むうちに、子どもたちの中に「半蔵はカラスに化けてみんなのを見にきている」「黒いものに化けている」というイメージが出てきていたため、悪者となる風魔小太郎のイメージカラーをねずみ色という設定にした。

6月20日(水)、この日は、風魔小太郎がいよいよ動き出したことを仕掛けようと計画していた。今までの冒険のこと、三日月村での出来事、忍者修行のことなどを年少児に報告しようと、「忍者の会」を3歳児のクラスで行うために集まり、その間に年長児の保育室内をメチャクチャに荒らしてもらうことで、風魔小太郎が刀を奪いに来たという仕掛けである。荒らす役を副園長・園長にお願いした。

年少児たちに向き合うと、自分が話したくて興奮している年長児たちの姿があった。その興奮している姿は、それだけ忍者の世界に入り込んでいる何よりの証拠である。半蔵の刀は、部屋を空ける時にはみんなで大切に持ち運ぶことになっていたため無事なことを保育者はわかっていたが、自分達の冒険譚を雄弁に語る子どもたちの表情をみていると、この後に待ち受ける展開がどのようになるのか、胸が高鳴った。

保育室に戻ると、室内はメチャクチャにされ足の踏み場もないほどであった。子どもたちは言葉を失い、立ち尽くし、泣いている子も数人いる。そして部屋の梁に手紙が張り付けてあり、「刀はどこへやった。またくるぞ。風魔小太郎」と書かれ、ねずみ色の手形が押しあてられていた。それを見つけるとさらに

泣き出す子どもが増え、先ほどまでの勇敢な表情が嘘のように弱々しくなっていた。担任はしばらく様子を見ていたが、なかなか動き出せない子どもたちを奮い立たせようと次のような言葉をかけた。

「みんなどうしたいの、半蔵の刀を力を合わせて守るんじゃないの、そんなにメソメソしてるんじゃない、三日月村に返してこよう」と言ったのである。

すると次の瞬間、Rちゃんが涙をぐっところえながら「ダメ、そんなことしたら、半蔵との約束やぶることになっちゃう」と叫んだ。あまりの迫力に担任も驚くと同時に涙でいっぱいになった。責任感があり姉御肌のRちゃんは、年長に進級した4月から“年長さん”としてのプレッシャーを感じすぎてしまうことや、家庭環境の変化などもあって少し不安定になっていた。そのモヤモヤを吹き飛ばせと自分に言い聞かせるように、心の底から溢れ出たその言葉は、まぎれもない真実であり、Rちゃんの心が大きく動いた瞬間だった。そしてそれは、一瞬にしてまわりにいた子どもたちに伝播し、「そうだ、みんなで守り抜くんだ」という力と新たな決意を与えた。一人、また一人と、自分の足元に散らかるものを片付ける姿に、葛藤を乗り越え一回り成長した年長児のたくましさを感じられた。

(6) 実践3 薬の調合

3つ目の巻物で半蔵から与えられた課題や、贈り物の手裏剣も子どもたちの修行(遊び)をさらにひろげていった。修行のひろがりを楽しみながら、新たな課題を与えたいと保育者らで相談し、もしも小太郎に襲われたときに、自分たちの身を守るように、薬の調合をする修行をさせることにした。薬といっても実際に薬草を煎ずる訳にもいかないので、赤・青・黄・緑の4色のかき氷シロップを用意し、それらを混ぜ、紫色は眠り薬、黄緑色はしびれ薬、黒色(全混ぜ)は半蔵カラーで元気がでる薬を失敗しないように作るという課題を与えることにした。

もちろんかき氷シロップだということは、子どもたちは知らない。それぞれのかき氷シロップを小瓶に分け入れ、4つ目の巻物(6月20日の午後、忍者コーナーに子どもたちが気づかないうちに置いておく)とともに子どもたちに半蔵から届く。

いつも刀の置いてある忍者コーナーをしっかりと確認している子どもたちなので、半蔵から新たな巻物が届くとすぐに気づくことは明らかであった。子

どもたちはすぐにそれを見つけた。担任がその中身を読んで聞かせると、「ああ、なるほど、小太郎をしびれさせるんだ」「眠らせてやっつけるんだ」などと、それぞれが想像を膨らませる。「元気になる薬も、怖くなった時に飲むといい」と、過去の経験とすり合わせて、使い方を想像する子もいる。そして早速調合にとりかかる。

まず作ったのは、黄緑色のしびれ薬だった。子どもたちの中で黄緑色をつくるには、黄色と緑色を混ぜるので間違いないという意見がまとまり、その通りにすぐに作り出すことができた。その次にできたのが、黒色の元気になる薬だ。しばらく考えていた子どもたちだったが、全部をグチャグチャに混ぜたら黒になる。という意見がまとまり、無事に黒色も作り出すことができた。

問題は紫色だった。「赤色と青色を混ぜる」という意見と、「緑色と青色を混ぜる」という意見に割れたのだ。子どもたちも、お互いの意見を主張しながら譲らない。しばらく考えたところで、Gくんが「ああ～もうわかんない」と頭を抱えた。続けてGくんが「何かで試せればなあ」と言うと、Tくんが「絵の具でやってみたらいいじゃん」と名案を閃いた。

すぐに自分のロッカーから絵の具を取り出し、水と筆を用意する。まずは緑色と青色を混ぜる。黒っぽくなった色に子どもたちは少し動揺している。次は赤色と青色である。固唾を飲んで様子を見守る子どもたちの表情があった。筆を動かしていくと見る間に紫色ができあがった。子どもたちの表情が一気に明るく、笑顔が溢れ、歓声があがる。意見の割れていた子どもたちだが、お互いを責めることもなく、一緒になって喜び合う姿がそこにあった。

できあがった薬は、副園長と園長で試してみることにした。「大丈夫、しびれたり、眠ったりしてしまっても、黒色の薬を飲ませればすぐに元気になるから」と言う子どもたちの言葉を受けて不安を抱きながらも、副園長・園長はそれを口に含んだ。そしてその後の名演技である。黒色の薬で無事元に戻り、「やっぱり半蔵は凄い」と子どもたちの憧れが益々大きくなった。

(7) 実践4 風魔小太郎推参

6月26日(火)、この日はいよいよ子どもたちと風魔小太郎を対峙させようと計画していた。風魔小太郎は同じ大泉町の公立保育園の男性保育者に依頼

し、協力を得た。着用してもらう忍者装束は、もちろんねずみ色で、同じ保育園の保育者の手作りである。ある程度の流れを相談し、あとは子どもたちの様子を見ながら対応していくこととした。

いつものようにホールでリズム表現をしていると、突然ねずみ色の装束に身を包んだ男が、もの凄いスピードで飛び込んできた。「刀はどこだ」の声に全てを察した子どもたちは大騒ぎだ。しかし誰一人として刀の在りかを話す子はいない。すると小太郎の術によって担任が操られてしまい、つかまってしまった。子どもたちは、すぐに自分たちの部屋に駆けていき、しびれ薬をもってきた。

小太郎にバレないように子どもたちの相談がはじまる。どうやってしびれ薬を飲ませるのかという大問題だ。しかし、またしてもTくんがみんなを落ち着かせながら、「元気のでる薬だとだまして飲ませよう」と提案し、みんなが一つにまとまる。子どもたち自ら「小太郎さんの仲間になります」という芝居がはじまり、見事にしびれ薬を飲ませることに成功した。そして担任も無事に救出したのである。

小太郎役を引き受けてくれた男性保育者の保育力にも改めて勉強させてもらったが、Tくんの成長にも驚かされた。Tくんはとても感受性が強く、喜怒哀楽がはっきりしていて自分を主張しすぎてしまい、友だちとトラブルになってしまうことも多かったが、ここまでの取り組みを通して、周りの意見を聞いたり、冷静に落ち着いて物事を判断して行動できる力がついてきた。そして子どもたちの能動的な姿に、大きな成長を感じた瞬間だった。

しかし、小太郎が残していった、「覚えておけ」の言葉が気になった子どもたちであった。

(8) 実践5 服部半蔵見参

7月3日(火)、忍者になりきり、修行(遊び)を楽しみ、数々の試練を乗り越え、忍者物語を紡いできた子どもたちのもとに、半蔵から最後の巻物が届く。そこには「よく刀を守り抜いたな。お泊り保育の日に君たちに会いに行くぞ。最後の約束だ、私の刀を三日月村で手にしたことは、誰にも言うてはいけない。」と書いてあった。最後の約束については、子どもたちと半蔵の絆の証として秘密を共有させたいと考えた。それがさらにお泊り保育当日につながっていくことになる。

子どもたちはもちろん大喜びだ。「やった〜」「いよいよ会える」嬉しさと期待感に溢れたまっすぐで

純粋な眼差しは、子どもたちの育ちを支える私たちの宝物である。保育者冥利に尽きる瞬間であった。

そして、お泊り保育当日に向け、保育者同士打合せを重ね、物語の最終章がいよいよ見えてきた。半蔵役と小太郎役には交流のある隣町の保育園の男性保育者に依頼することにした。小太郎については、前回登場した保育者も同日に自園のお泊り保育があるためお願いすることができず、前回とは違うが顔は忍者装束で隠れているので問題ない。この二人の男性保育者とも、子どもたちが降園した後に入念に打合せをし、現場も確認をして用意を進めた。

7月6日(金)、お泊り保育当日になった。天気はあまりよくないが、子どもたちの全身から期待感とワクワク感が溢れ出ている。マスつかみ・火起こし・デザートづくり・ドラム缶風呂など予定をこなしていき、あっという間に夕方になった。とうとう降り出した雨に、室内での活動に変更になってしまったが、夕飯もこの日の特別メニューである。給食先生と子どもたちの忍者物語を共有しながら考えた。カラクリソーメン(流しソーメン)・忍者おにぎり・白玉もなかアイスなどここでも忍者にこだわった。お皿も町の陶芸サークルの方々にお手伝いをしていただき、自分たちの手で土をこね、忍者の絵を描き、世界で一つだけのお皿を焼いてつくった。箸も、お椀も自分たちの手で竹を切り、やすりをかけて手作りした。それもこれもすべて忍者修行なのであった。

キャンプファイヤーの代わりに、手作りの忍者灯笼をホールに灯してしばらくすると、突如黒い影がホール中に風を巻き起こす。「半蔵だ」凄いスピードで走り回る半蔵の姿に、子どもたちも自ら走り出す。やっと会えた半蔵に刀を無事に返すと、子どもたちの口から質問が溢れ出してくる。半蔵の体術をみせてもらった子どもたちの目の輝きはとても眩しい。「次は僕たち私たち」子どもたちも修行の成果を半蔵に見てもらい、認めてもらう。

「君たちは立派な忍者だ」と半蔵が言った次の瞬間、またもやねずみ色が現れた。半蔵は子どもたちに、「さがっている」と声をかけ、半蔵と小太郎の対決がはじまる。固唾を飲んで見守る子どもたちである。体操と空手の経験者の二人の対決は、まさにアクション映画を見ているようだった。拮抗する力のぶつかり合いはその場では決着がつかず、お互いにけん制しあいながら、二人は再び姿を消した。しばらく呆然とする子どもたちだったが、保育者にう

ながされ夜の保育園探検にでかける準備をする。

(9) 実践6 服部半蔵との再会・別れ

この保育園探検は、毎年のお泊り保育の最後のイベントとして行っているもので、その年のお泊り保育のテーマ・教材に合わせて、園内の保育室をその物語の世界観につくりあげ、いままでの取り組みの中で得てきた知識や力を駆使して課題を乗り越えていくものである。いつもグループ活動を行っているグループごとに、子どもたちだけで進んでいく。今年はこのなかで、子どもたちに風魔小太郎をやっつけさせ、最後に服部半蔵と再会させ、半蔵から宝物をもらう流れに計画していた。宝物は、昔の千両箱のイメージで、それを小さくしたものを木で加工して作った。中身は半蔵といつも一緒にいられるように、ウッドビーズとガラス玉でお守りブレスレッドを作った。もちろん全てが保育者の手作りだ。探検の中に出てくる登場人物も、担任以外の保育者が衣装を身に着け演じている。

出発前に半蔵から教えてもらった薬の調合で、黒の元気になる薬を飲み、意気揚々と歩み出す子どもたちであった。口から心臓が飛び出してしまうほどの胸の高鳴りを、仲間と手をつなぐことで少しごまかしながら進んでいく。忍者屋敷に足を踏み入れると、そこには紐が張り巡らせてあり、鈴がついている。少しでも触れてしまえば音が鳴り侵入したことが露見してしまう。子どもたちは、息を潜め慎重に罫を潜り抜けていく。

次に現れたのは、忍者の師範である。味覚・聴覚・視覚・嗅覚・触覚をつかった課題を子どもたちに与えるが、仲間と協力して見事に答えていく。

「免許皆伝」と師範から合格をもらい先に進むと、町娘が役人にいじめられている。半蔵から教えてもらった薬の調合で、しびれ薬と眠り薬を作り出し、役人に飲ませ、無事町娘の救出に成功した。さらに進むと、三度ねずみ色と対峙することになる。怖さに負けそうになる心を、半蔵への憧れと今までの修行のなかで得てきた力でグッと抑え込み、子どもたちは、小太郎からのいくつもの難題に答えていく。そして最後に小太郎が、「半蔵の刀はどこで手に入れた、教えてくれたら逃がしてやる。」と言う。少しの沈黙がどんどん広がっていき静寂となる。「はやく言え」と脅されるが答えない。そして「言えませぬ」と力強い一言が静寂を打ち破る。たった一言のその言葉に、子どもたちの服部半蔵との絆と、こ

の想像的な忍者物語の中の登場人物としての決意が溢れ出ている。陰からその様子を見守っていた担任も、思わず涙があふれた。

そして、「臨・兵・闘・者・階・陣・列・在・前」と力強く印を結び、悪しき風魔小太郎を打ち負かし、いよいよ服部半蔵と再会するのである。先ほどまでの戦いと葛藤を乗り越え、半蔵と対面した子どもたちの目には、希望の光が戻り、溢れ出る涙で光り輝いている。「よくやったな、もう大丈夫だ」それらをすべて受け止め、包み込む半蔵のその一言に、子どもたちの心は大きく成長し、胸の中でさらに高鳴った。

半蔵から宝物をもらい、別れをつけて担任のもとに戻る子どもたちの表情は、涙ぐみながらも、自信と希望に満ち溢れた達成感で満たされていた。

(10) 振り返り

これらの取り組みは、大泉町の公立保育園で毎年行われており、実践するには、担任以外の保育者との子どもの姿の共有と、目的意識の共有、それらを土台とした協力が必要不可欠である。そうした職員間の環境づくりも保育者に課せられた使命である。

そして、実践を振り返り見えてくるのは、想像的で創造的な仕掛けや遊びのなかでの、子どもたちの心の動きであり、その心の動いた瞬間こそ、社会情動的スキルが育つ瞬間だ。保育者が子どもたちと共にワクワク感を共有しながら仕掛けをし、その世界観に徹底的にこだわり抜き、楽しみ抜いていくことで、打算や理屈ではなく“全面発達”を促し、能動的で主体的な「生きる力」を自ら獲得していく子どもたちの姿が、真実としてそこに存在する。

この1カ月あまりの取り組みのなかで得た力が、子どもも保育者も一回りも二回りも成長させ、その力が普段のリズム表現や歌、描画、その他の活動につながっていき、この先のそれぞれの課題に対して向き合っていく基礎をより強くしていく。そうした年長児の姿に憧れ、真似をし、背伸びをして共に成長していく低年齢児たちの姿もあった。まさに「子育て」である。低年齢児たちの眼差しは、年長児が服部半蔵に対して抱いていた憧れと同じものである。

こうした保育環境を整え、創造した先に、自己肯定感と「生きる力」に裏打ちされた、それぞれの個性と力で、未来を切り開いていく子どもたちのたくましい姿が想像できるのである。

5. まとめと考察

「はじめに」で述べたように、新要領・指針で示された「資質能力の3つの柱」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、従来の環境を通して行う保育、遊びを中心とした活動を通して身に付けていく姿である。つまり、保育は環境を通して行うことが基本である。

環境の内容には、子どもが身の回りの対象に興味・関心をもって親しみ、何かに気付いたり、工夫したりする経験が含まれている。保育者はこのことを十分に理解し、子どもたちの様々な経験を「環境」と関連させて考えることが必要である。また、子どもの興味・関心や、その時の思いを的確に捉え、子どもに寄り添った保育を展開するためには、保育者が子どもと共に、仲間の一員として生活や遊びを楽しむことが大切である。

そこで今回は、年長児のお泊り保育をゴールとしたプロジェクト・アプローチを取り入れた保育活動の一例を取り上げた。そして、その活動をエピソード記述により分析し、環境構成としての仕掛けを通じた遊び活動の進展とともに起こる子どもの変化について、あそびの展開図(図2)を作成し、子どもの成長について検討した。

大泉町立保育園におけるプロジェクト・アプローチの特徴は、保育者が準備する仕掛けの数々である。保育者自身がその仕掛けにワクワク感を抱き、想像力と創造力を駆使して仕掛けていく。そして、その仕掛けを園全体、町立保育園全体と協働しながら作り上げていくのである。

図2で示したように、仕掛けに導かれた子どもたちは、「調べる」「考える」「試す」「相談する」「挑戦する」「励まし合う」「約束を守る」などのさまざまな経験を通して、協同性を育てていったことがわかる。協同性は、平成20年の幼稚園教育要領改訂で初めて盛り込まれた内容である。協同性な遊びの展開は、目的に向かって協力することのみを指すのではなく、遊びを通して子どもたち相互の関係が深いものとなり、ともに工夫したり、試行錯誤したりする経験の中に重要な育ちがあると考えられる。

この事例においては、子どもたちがともに工夫し、試行錯誤している様子が見て取れる。何度も不安や恐怖と戦いながら、子どもたち同士で声をかけ合い、次々に課題を解決していく。そして、そのプロセス

を経てクラスが一つにまとまっていく様子が描かれている。ゴールであるお泊り保育の日には、半蔵との約束を守り、刀を守り抜くことができたのである。その結果、子どもたちが得たものは、「自信」であり、「希望」であり、「達成感」であった。

ここで生まれた効果は、この保育実践が「エマージェント・カリキュラム」の理論を基に展開されたことから得られたものであると考えられる。エマージェント・カリキュラムは、「創発的カリキュラム」と訳され、子どもの主体性や興味などに応じて臨機応変に、子どもとの相互作用のもと、つくり上げていくカリキュラムのことである。子どもが予想とは異なる反応を見せたときも、保育者はそれを柔軟な態度で受け止め、環境を再構成して働きかけを変えていくことで、遊びや活動を深めていくのである。

加藤ら(2005)は、子どもたちの必要感と必然性をベースに保育が展開されることの大切さと、保育者の存在(黒子ではなく、姿の見える保育者)があつてこそ、協同性な遊びが生まれると述べている。また、川田(2009)は、協同性は大人主導で描く道筋ではなく、ボトムアップなものであることが重要であるとしている。

この事例においては、保育者が子どもの成長を願い、子どもたちの必要感と必然性を見極め、適切なタイミングでの適切な環境設定(仕掛け)をすることで、協同性な遊びが生まれ、そのプロセスを経て子どもたちが大きく成長したと考えられる。まさに、環境構成としての仕掛けが、子どもの発達に大きく影響した事例であると言えよう。

引用文献

- 1) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説書,保育所保育指針解説書,幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説書』,2018
- 2) 鯨岡峻『エピソード記述入門—実践と質的研究のために』,東京大学出版会,2005
- 3) 加藤繁美・秋山麻実・茨城大学教育学部附属幼稚園『5歳児の協同性な遊びと対話的保育』,ひとなる書房,2005
- 4) 川田学・津田千秋「幼児期における協同性とその援助の視点を探る」,香川大学教育実践総合研究18,pp65-78

